



第155号
福島県小学校長会
北会津支会広報
令和4年12月14日
発行人 小林 義弘
編集人 大塚 進一



《 巻 頭 言 》

めざす学校経営の実現のために

福島県小学校長会北会津支会副会長 佐藤 俊一
(会津若松市立日新小学校)

学校経営は、校長にとって「やりがい」である一方、「責任の重さ」や「判断の難しさ」を感じるもので、学校経営の悩みは日々つきません。学校経営と一口でいっても、内容は多岐にわたるとともに、校長一人で、学校の全部を動かすことができるわけではなく、教職員の共通理解・協力のもと、成果と課題をふり返りながら、計画的に行うという難しさもあります。そのため、学校経営・運営ビジョンを作り、組織的に行うことが重要となってきます。

今年度も、新型コロナウイルス感染症はなかなか収束せず、各学校において知恵を出し合って、工夫しながら子どもたちの教育活動を行ってきたことと思います。学校規模、学校の伝統、地域性など、まさに、「答えが一つでない問題」に対して、どのように取り組むかという「判断・決断」「実行」の難しさを感じながら「子どもたちにとって何が大切か」ということを常に意識しながらの学校経営だったことと思います。幸いなことに、校長会の横のつながりや教育委員会の指針等により、新型コロナウイルス感染症と教育活動をどのように進めていけばよいかについては、ある程度の見通しがついてきたことと思います。

しかし、喫緊の課題である学力の向上と密接に関わる、授業時数の増加と授業の質の改善、外国語科、道徳の教科化、プログラミング教育、生徒指導の問題など、まだまだ課題は山積です。教職員の年齢構成が、若い教員とベテラン教員の二極化構造という問題もあります。また、個としての教員の指導力と意識の差は、どの学校にも見られることだと思います。「全員がエースで四番」でなくとも「それぞれのよさをどういかすか」は、難しいものです。働き方改革やパワーハラスメントの問題など「校長の信念のもと、校長が先頭に立ってリーダーシップを発揮すればいい」という単純なものでもありません。

これまでも、教育において大切なことは、不易と流行を十分に見極めた教育を行っていくことだと言われていています。グローバル化・情報化時代を生きる子どもたちは、「流行」としての新しい教育は不可欠です。一方、豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、他人と協調し他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、社会が変化しようとも、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」＝「不易」も大切にしていこうということです。この見極めによる集中と選択も重要です。

これからの学校経営は、ますます難しく、困難な問題と向き合って進めていかななくてはいけないと思います。「答えが一つでない問題」に対応するためにも、「情報を収集する」「適切な判断をする」「教職員を統率する」「学校経営運営ビジョンを明確にし発信する」「多面的・多角的な見方をする」等々・・・私たち校長の資質・能力をさらに向上させる必要があります。来年度には、校長会の県大会も会津で開催されます。めざす学校経営の実現のために、この校長会の役割は、ますます重要になっていくことと思います。

ご退職校長先生からの メッセージ

「校長会のきずな」

前猪苗代町立猪苗代小学校 秦 尚志

北会津小学校長会の皆様には、在職中大変お世話になりました。あらためて感謝申し上げます。

早いもので退職して7カ月が過ぎました。今、最後の2年間を振り返ってみますと、新型コロナウイルスに振り回された2年間だったなあと思います。2年間の高校での勤務を終え、久しぶりに小学校に戻るにあたり、こんなこともしたいあんなこともしたいという思いがたくさんありました。新型コロナウイルスについては、半年もすれば落ち着いて、以前と同じようにいろいろな活動ができるようになるだろうと楽観していましたが、第2波、第3波と続き、あっという間に令和2年度が終わってしまいました。そして、今年度こそはと意気込んで始まった令和3年度も、行事等は、規模縮小か中止となりました。しかし、この2年間は厳しかったことは厳しかったのですが、考えてみると、38年間の教職の中で、この2年間ほど頭を絞り、考えられる限りのアイデアを出し、学校経営に当たった年はなかったかもしれません。また、全職員で大きな危機に立ち向かっているんだという一体感も強かったと思います。

そんな中、心の支えとなったのは、校長会の仲間からのアドバイスであり、情報交換でした。危機に面したとき、やはり一人ではなかなか不安で心細く、いろいろ思い悩みますが、仲間がいるということは、大きな支えになりました。まだまだ新型コロナウイルスとの闘いは続くことでしょう。そのため、悩むことも多いと思いますが、校長会の仲間達との強いつながりをフルに活用し、乗り切ってください。何より健康第一、応援しています。

ご転出校長先生からの メッセージ

「勇気と挑戦」

前猪苗代町立長瀬小学校 佐々木 豊

2年前、新任校長として長瀬小に赴任した年は、新型コロナウイルス感染症のため行事等が次々と延期や中止となる変更の連続で、その判断に迫られる日々でした。そのとき助けていただいたのが校長会のネットワークです。他校の取組や助言を伺うことで、何とか判断を下すことができました。大変感謝しております。

長瀬小では、児童の消極性への対応として「勇気と挑戦」を合言葉にし、全校集会などでよく話をしました。学校は変わりましたが、この「勇気と挑戦」という言葉はまだ私の心の中に残っています。何か新しいことに取り組むとき、この言葉が背中を押してくれます。

この言葉に励まされ、今年5月から行っているのが「校長室だより」の発行です。内容はともかく、なんとか週1回のペースで発行を続け、11月中旬には23号になりました。

また、現在取り組んでいるのが佐藤学先生の「学びの共同体」です。喜多方市教委の推奨もあり、本校に取り入れるべく、佐藤学先生の本を読んだり、先生方へ働きかけたりしている毎日です。

「目の前の子ども達のために何ができるか」これは、長瀬小時代からいつも考えていることです。

長瀬小での経験と「勇気と挑戦」を胸に、今自分にできることを行っていきたいと思えます。



ご転出校長先生からの メッセージ

「地域との架け橋を目指して」

前磐梯町立磐梯第一小学校 酒井 康雄

以前、磐梯町において磐梯中学校教頭として3年間お世話になりました。そのため、校長として赴任した際、「おかえりなさい」と多くの方々に声をかけていただき、地域とつながる温かさやすばらしさを改めて実感させられたことが思い出されます。

現在、ますます地域と連携を図りながら学校経営を進めることが求められ、学校と地域の架け橋となる役割が校長に求められていると考えます。

今年度、喜多方市立関柴小学校に赴任しました。喜多方市では「農業科」を推進しており、低学年ではサツマイモ栽培、中学年は大豆や落花生の栽培、高学年は水稻栽培を中心に、農業科支援員の方々にお世話になっています。農業科支援員の中には、登校時の見守り隊の方や、学校運営協議会の委員の方、民生委員の方もいます。

活動の合間に、それらの方々与本站の児童として体験させたいことや大切にしたいことなどが話題になり、いつも話が盛り上がります。特に、栽培活動を通して収穫の喜びや地域の人への感謝の気持ちを味わわせたい、見守り隊の方と一緒に登校する集団登校の安全確保を充実させたい、高学年としての意識を育む朝の職員玄関付近のボランティア清掃や校庭の除草作業などを伝統として残したい、教職員が変わっても地域として学校の教育活動を支える体制をつくりたいなど、話題は絶えません。その中でも根底にある大切にしたい思いが、「地域と子どもたちをつなぐ」ということです。

学校を様々な形で支援したいという方が多い地域だからこそ、学校の目指したいことや困り事を発信し、地域の方々との何気ない会話を大切にしながら学校と地域との架け橋となるよう日々取り組んでいます。

転入校長所感

「磐梯一小と言えば」

磐梯町立磐梯第一小学校 菅家 篤

磐梯町の幼小中一貫教育「夢を語り 夢に向かって努力する子どもの育成」の具現化と磐梯一小の子どもたちの自信と誇りのために、教育活動のあらゆる場面で、子どもたちも私たち教職員も、保護者や地域の皆様も唱えられる合言葉をつくりました。



この合言葉には、こんな子どもに育ってほしいという三つの願いを込めました。

- 気持ちが伝わる「あいさつ」ができる子
(コミュニケーション力・思いやりの心)
- 進んで「はっぴょう」できる子
(思考力・判断力・表現力)
- 夢に向かって「なかま」と共にチャレンジする子
(自己マネジメント力・協働)

磐梯一小と言えば「ドリーム&チャレンジ!」、この合言葉を常に意識しながら、子どもたちと共に、教職員一同、精一杯取り組んでいきたいと思えます。

10月にCSの機能を生かした保護者と教職員によるワークショップを行い、様々なご意見をいただきました。今後も家庭や

地域と目指すべき学校の姿を共有しながら学校経営を進めていきたいと思えます。



転入校長所感

「歌い継がれる偉人」

猪苗代町立猪苗代小学校 吉野 徹

「月の歌」を決め、全校生で歌う活動が行われている小学校が多いと思います。本校でも校歌はもちろんですが、季節や行事などに合わせて様々な歌が月ごとに計画され、毎朝子どもたちの元気な歌声が聞こえています。本校の「月の歌」で特徴的なこと、それは「野口英世の歌」（野口英世顕彰歌）が2曲歌われていることです。

1曲目の「野口英世の歌」は、土井晩翠作詞、古関裕而作曲の「野口英世」です。昭和15年（1940年）に土井晩翠が野口英世の生い立ちをたどる歌詞を1番から6番まで綴り、それに古関裕而が美しいメロディーを付けた歌です。本校では9月の歌として全校生で歌い、また猪苗代町の野口英世博士顕彰記念町内小中音楽祭でも町内の小・中学生に歌い継がれています。

2曲目の「野口英世の歌」は、文部省唱歌「野口英世」（昭和17年2月・文部省初等科音楽二唱歌）です。やはり野口英世の生涯をたどる歌詞が1番から3番までに綴られています。本校では11月の歌となっています。

この2曲の他にも「野口英世の歌」はあるようです。また会津の小・中学校には、野口英世をたたえる歌詞が綴られた校歌も数多くあるようです。

このように「顕彰歌」などで歌い継がれる偉人の母校である猪苗代小学校は、令和5年で創立150周年、そして野口英世が本校を卒業して130年目を迎えます。この「野口英世の歌」と共に、野口英世の遺訓（目的・正直・忍耐）を後生につなぐ営みをこれからも大事にしていきたいと思いをします。

新任校長抱負

「一步一步」

猪苗代町立長瀬小学校 笹島 明美

初めての会津地区。教科書の改訂、新型コロナウイルス感染症対策等で大きく変化した学校。「果たして対応することができるのか」と不安いっぱいの中、長瀬小学校に着任しました。その不安を和らげてくれたのは、子ども達の元気いっぱいのあいさつでした。長瀬小学校の「3つのあ」の取り組み「あいさつ、あとかたづけ、あるきかた」が身につけていて素晴らしいと思いました。

そんな子ども達にも課題が。自己肯定感・自己有用感が低いということ。このことから今年度の現職教育をキャリア教育にしようと考えていた先生方。子ども達に寄り添い、成長させていきたいという意欲を感じました。そして、私が校長としてめざしていた学校とは、「子どもも教職員ものびのびと自己実現を図っていくことができる学校にしていきたい。」というものでした。実際、「自分のよさや課題に気づき、『なりたい自分』の実現に向けて挑戦する児童の育成」を研究主題としました。まさしく自分がやりたい学校づくりを行うことが子ども達と先生方と一緒に実践していけそうです。

着任してもう8か月を過ぎましたが、まだ校長としての第一歩を踏み出したところで、分からないことが多く対応しきれいていません。日々、子ども達、先生方と共に自分自身も研鑽を積みながら、一步一步進んでいきたいと思いをします。

北会津地区の校長先生方には、今後とも様々な場面でご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

東北連小報告

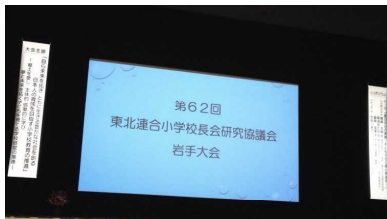
「目指す学校づくりと組織・運営の活性化」

猪苗代町立吾妻小学校 安藤 靖

第1分科会では「目指す学校づくりに向けた将来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策定と教職員の参画意識を高めることにより、活力ある組織・運営を進めていく」ための方策について協議された。

まず、福島県いわき市立豊間小学校林校長先生より実践研究の発表があった。保護者、地域、学校関係者へできる限り学校の様子を伝えること、職員全体で課題と現状について共通認識すること、課題解決のための役割分担を明示することが成果としてあげられた。特に、研究の方向性で示された、「チーム学校のメンバーの共通理解を深め実践意欲を高める校長の働きかけを工夫すること、誰に対してどのような関わりをしたことが有効であったのか」を重視していたことが大変勉強になった。

次に岩手県花巻市立花巻小学校菅野校長先生より「教職員の参画意識を高めるための校長の果たすべき役割」について発表された。活力ある組織づくりのためには、教職員の能力の適切な把握、職員一人一人の立場や能力に合わせた働きかけや支援が重要であること等が成果としてあげられた。職員間でコミュニケーションを図る時間を生み出すことや、新組織体制を複数で検討することなど、課題にあげられていたことは、自分の課題と共通点が多く、たくさんのお話を学ぶことができた協議会であった。



東北連小報告

「知性・創造性を育む教育課程」

猪苗代町立猪苗代小学校 吉野 徹

第3分科会「知性・創造性」では、「知性・創造性を育む教育課程」を研究課題とし、「校長のリーダーシップのもと、知性と創造性を育む教育課程の編成と実施・評価・改善を図るための具体的方策と成果」について、青森県と岩手県の小学校長会の研究発表が行われた。

1つ目の青森県南地方（津軽地方の南側に位置する黒石市、平川市、南津軽郡）小学校長会では、カリキュラム・マネジメントに関する校長会の事例研修会や各校の取組資料の共有を行い、自校の実践を深化させ、新たな視点を得たりするなどの相乗効果が生まれたという研究発表があった。

2つ目の岩手県一関地区小学校長会では、「社会に開かれた教育課程」編成のために、各校で「自己評価シート」や「プランニングシート」を活用することで、学校課題や解決方法の方向性について教職員の参画意識が高まり、学校全体でカリキュラム・マネジメントを推進することができたという研究発表であった。

この2つの研究発表に共通した取組は、校長のリーダーシップのもと、教職員の共通理解の場の設定と参画意識を高める体制づくりをしたことである。

教職員の様々な本音を引き出し可視化すると同時に、教育課程編成に教職員一人一人の考えを反映させること（ボトムアップ）で、教職員の主体的取組が深まり活性化する。「知性と創造性を育む教育課程」編成を実現する大事なポイントの1つは、明確な共通目標に向けた教職員の参画意識を高めることである。

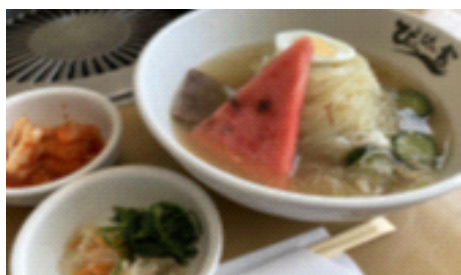
東北連小報告

「盛岡冷麺のように ～学校と地域の連携・融合～」

磐梯町立磐梯第一小学校 菅家 篤

冷麺は元々朝鮮半島の平壤で生まれたものだそうです。朝鮮半島出身で、日本に移住してきた方が昭和29年に盛岡に食堂を開き、故郷を懐かしみ盛岡に冷麺を出したのが始まりとされています。当時、お客はゴムのような麺に驚き、中々定着せず大変苦労したようです。当初はまるで相手にされなかった冷麺も、改良に改良を加えることにより、日本人の嗜好に合うようになり、今や冷麺は「盛岡冷麺」として地域ブランドの地位を築くまでになっています。朝鮮半島と日本の食文化が融合し、新しい文化が生まれた一つの例と言えます。

さて、盛岡大会二日目は、第10分科会「社会との連携・協働」に参加しました。東北6県の校長先生方によるグループ協議では、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、社会との望ましい連携・協働の在り方について、情報交換や意見交流を行いました。地域との連携・協働にはスタンダードなマニュアルはなく、なかなか苦労されている様子でした。だからこそ、校長が試行錯誤しながら「連携・協働のカタチ」の改良を重ねていくことが大事なのだと感じました。学校の変革のためには、地域との連携は欠かせません。学校と地域のよさが融合したとき、どんな学校文化が生まれるかワクワクしませんか！



二日目の昼食で味わった盛岡冷麺

アイデア実践

「全校生の担任であれ」

会津若松市立松長小学校 星 尚志

当初より教職員に対して、「目的達成のために、全校生の担任であれ」と説いてきた。私自身も個を見つめ、管理・経営はもちろん、課題を解決する一人として歩いてきており、その取り組みの一例を述べる。

- 1 外国籍児童の入学にあたり、式辞の一部を英語で述べ、たとえ一人でもおそろかにしないという経営方針を示した。
- 2 講話では、視覚で理解を深めることができるように映像資料を多用するとともに、先の時代を生きてきた人間として、実体験から生き方を考えさせてきた。
- 3 コロナ禍に加え、猛暑、熊の目撃などを踏まえ、夏休みのプール指導を見直した。人数に応じた地区割や指導時間、さらに、PTAが監視しやすいように、プールサイドに児童の立ち位置を示すドット塗装も施した。
- 4 W i - F i 環境が十分でない家庭のために、デジタルドリルの無償トライアルを活用し、授業と家庭学習の一体化、つまずきのさかのぼり指導、発展的な学習などにも活用させながら、ICT機器に不慣れな教員の不安を取り除き、家庭への持ち帰りを軌道に乗せた。

その他にも、コロナ禍の先を見据え、区内のごみ拾い活動、災害やJアラートなどに対する避難システムの構築、管理職不在を想定した避難訓練など、精力的に取り組んできた。未来を担う児童のよりよい成長のため、教員、保護者や地域を巻き込みながら、考え方や進め方などを、校長というリーダーとして、さらに経験者として、拙いながらも自分の背中を見せながら、学校全体を牽引してきたつもりである。

アイデア実践

「大切にしている3冊」

会津若松市立荒館小学校 唐司 和彦

校長として、情報の大切さは身にしみる。「学力の実態は?」「〇〇の児童は?」「事故の経緯は?」「今後の対応は?」など、できるだけ早い対応が求められる。情報をできるだけ早く取り出すために、情報を一元化する型が自分なりにでき、以下のようなになった。それぞれの先生方はもっと素晴らしい実践をしておられると思うが、アナログであるがシンプルで長続きしている。

【学校基本情報ファイル】

着任してまず作成するファイルである。「〇〇小 基本情報」というファイルである。児童、地域などに関する学校経営に必要な基本情報はすべてこのファイルに綴じ込んでおく。各種資料の作成や問い合わせがあった時は、このファイルを開けば何とかなる。

【備忘録（覚書や雑記帳）】

B5版のただの大学ノートである。その日のToDoリスト、電話対応、生徒指導の報告、先生方からの相談など、その日あった情報はこのノートに時間とともに記録する。重要なものはマーカーで色分し、メモを渡すときはノートから転記する。問い合わせがあった時、万が一事故が起こった時、時系列に記録してあるので、見返せばなんとかなる。紙片へのメモは散逸する。

【スケジュール帳】

市販のB5版、ひと月分が見開きになったものである。字を小さくせざる得ないが、校内行事、出張、提出期日など、開けば月単位で見通せる。10数年これだけである。後半のMemoのページも児童数の動向など必要な情報の記録に活用している。

教育随想

「地域と共に」

会津若松市立大戸小学校 遠藤 淳

私は、小学校10校で勤務してきた。小規模3校、中規模2校、大規模5校である。それぞれの学校で『開かれた学校』、『地域に根差した学校』と教育課程では唱っているが、なかなかその形が見えてこなかった。どうすれば開かれた学校になるのか、地域に根差すとはどういうことなのかを考えてきた。

ただ単に、地域の人材の方に依頼し、学校に来ていただいて子どもたちの活動の手助けをしていただくだけでいいのだろうか。教頭時代には、地域との連絡調整役として地域とのパイプ役としての役割を果たしてきた。

大戸小学校に校長として赴任し、地域の会合や学校運営協議会に参加するようになり、少しずつ理解できるようになってきた。地域の方々は、今の学校や子どもたちの様子に大変関心を持っており、学校の名前が新聞で紹介されると、たくさんの方々に声をかけられる。うれしい限りである。大戸地区の学校運営協議会では、学校の現状や課題、これからの学校の在り方などについて、何度も話し合いを重ねてきた。今後、児童数が減っていき、存続が危ぶまれていることから、『地域で学校を守り、支えたい』という地域の方々の思いが一つの形となったのが、大戸小・中学校の小規模特認校制度が認められたことである。

「もし悩みを抱えている子どもたちが来たら俺たちでめんどろみっばい。」ある委員さんの一言である。

学校の様々な課題は、地域の方々に遠慮なく相談し、共に解決していけばいいと思った瞬間である。

教育随想

「自慢の立地で」

猪苗代町立翁島小学校 吉川 奏子

本校の自慢のひとつは立地です。築55年を数える箱形校舎の北側に、表磐梯が雄大にそびえ立っています。南側から校舎の写真を撮ると、背景に表磐梯がたいそう大きく写りこみます。これがとても美しいのです。うれしくなって昨年度の着任時からこのアングルの写真を本校H. P. のトップページに用いています。季節の移ろいを表すことがいつの間にか楽しみになっていました。

一人楽しんでいると、もしかして自分は自然の姿から季節を感じて暮らしてこなかったかもしれないと気づきました。これまでは教育活動や気温の数値などから季節を感じていた…。だいぶ人間らしくなかったですね。猪苗代に来てからは山肌の色の移り変わりや田畑、あぜ道に咲く草花、白鳥飛来等を日々目の当たりにし、自然の風物詩に感動しています。稲刈りが終わると蕎麦の花が咲く。これは2年目にして感動。季節の変化を日々味わっていると、心にゆとりをもて、視野を広げなさいと教えられているようにも感じます。

さて、本校は令和5年度末の閉校が決まりました。冒頭の自慢の立地も残り1年。野口英世博士の出身校という地域の誇り、水環境学習等、歴史と伝統のもとで育った子どもたちが統合小学校に移行できるよう寂しい気持ちとともに準備を進めて参ります。忙しくなってきました。



教育随想

「千里縦割り班活動」

猪苗代町立千里小学校 高久 賢一

千里小学校には、伝統の縦割り班活動がある。通学班はもちろん、毎日行っている清掃も縦割り班だ。さらに、絆をより深めるために、年3回、縦割り班ごとに「遊び」を取り入れている。5月は、校庭と体育館を使った遊び、10月は秋の遠足時にカメリーナ広場を使った遊び、そして、11月は長縄とびである。

遊びというと現代っ子はゲーム？というイメージがあるが、千里縦割り班の遊びの中で3本の指に入る人気の遊びは、「鬼ごっこ」「だるまさんが転んだ（だるまさんの一日）」「リレー」である。3つとも活動できる広ささえあれば、準備がいらないシンプルな遊びだ。子どもたちは、この遊びをあきらめず、「終わり」と言われるまでずっと続けている。上学年の子は下学年の子の面倒を見ながら、そして下学年の子は上学年の言うことを聞きながら…。

11月、長縄とび大会が行われた。長縄で8の字跳びを行うこれまたシンプルなものだが、1年生は初めての子も多く、なかなか長縄の輪の中に入れない。そんな時は上学年の子がそっと背中を押し、入るタイミングを教えてくれる。失敗も多いが、練習の度に跳べる回数も少しずつ多くなり、班全員の顔に笑みが広がっていく。

子どもたちは「遊び」を通して絆を深め、そして社会性を身につけていく。天気の良い日の校庭では、「この指止まれ」と異学年の子同士が集まり、本気で鬼ごっこをする千里小の子どもたち。この光景を見て思わず微笑んでしまう私である。